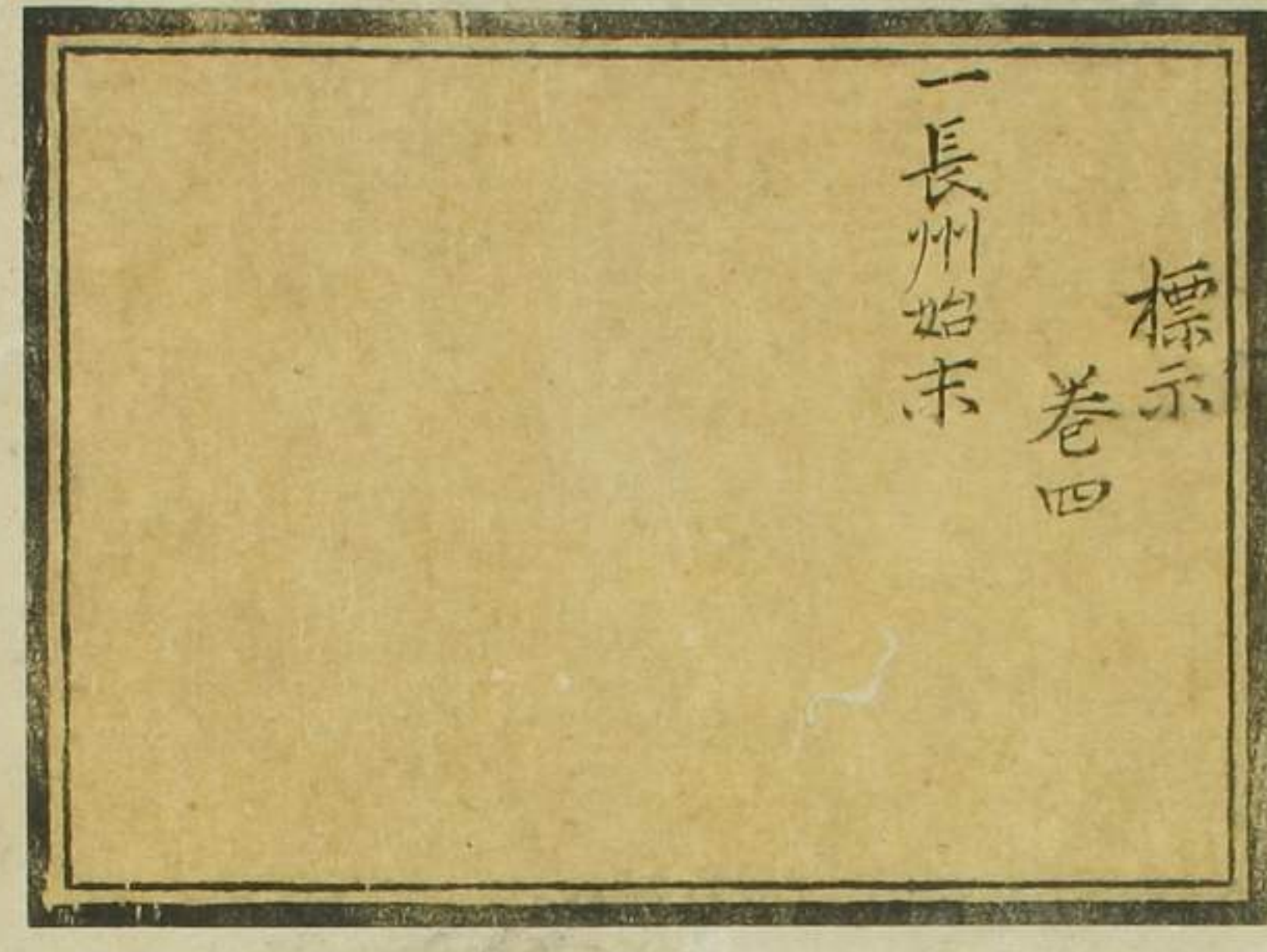




文久
壬戌

官武通記

四



標示
卷四
一長州始末

リ 5
6419
3



第 二

風說

第 四

即見述之通於 廟者即先中之世大和身殿

第 五

第 五

即家來永井稚某即先中之世述於內大

畧字

第 六

風說



第 七

即家來永井稚某義之世大和身殿中上段

次子之義云條即上指出為大畧字

第 八

公武是也即凝淨由水解散而航海由開

武威海印之義云義之世家來永井稚某

即所上指出連白書字

第 九

土砂處中簡抄

第 十

一 風說

第十一

一 東師守商抄

第十二

一 師長門守叙古帶系之義存 即所分也

即分於西書付字

第十三

一 風說

第十四

一 東師守商抄

一 風說

第十五

第十六

一 同形

第十七

一 同形

第十八

一 公武 師曾程能因旋可言 出依賴 思百孩

一 師長門守叙古 即所分也 即分由西書付

字

第十九

今般公方操即上洛 即國初之先聚也
列後德系也 作付我抄云云 義存之抄也
所建白字字

第二十

即國志之版 即屬悅也 思在抄云云 義存
大納言中山卿 忠家東浦教員也 在古抄
古如白字字

第二十一

所增長門守 義存所考 亦東師也 在古抄
引云云

義存之抄 出於忠臣書字

第二十二

風說

第二十三

所家東字 尚抄

第二十四

東師字 尚抄

第二十五

脚氣付之助母 應遠之意 可作上之字 作出抄
唐子之字

第二十六

即上系之官書上方等以進獻物之義也

第二十七

風說

第二十八

東師中簡抄

第二十九

風說

第三十

即上系後世書等義且臣父子中侯因旋

由義也此家東元利苑前議奏元抄出也

書付二通字十五

第三十一

七月十六日抄無字習院議傳奏西及大納言

中山卿大納言三條卿大納言防城卿宰相將

卿官卿等以西兩會之義也此抄念古冰

解字也此抄出於寺行二通字

第三十二

後抄之同心職力也

勅使古輔聖信及後也

一 书何日... 附札字

一 第三十二

一 勒使... 何... 附札字

一 第三十四

一 风说

一 第三十五

一 回影... 第三十六

一 回影

一 第三十七

一 回影... 第三十八

一 部父子... 附所... 附札字

一 第三十九

一 大... 附所... 附札字

一 第四十

一 御膳長門守殿片病急片快急片奉出指片
守付字

第四十一

一 八月二日於學部院議借奉片商儀公戊午日未
以奉 官武降恩出例當一奉出再出
取如所求於地下守平儀一分以只一分以只
教免只一分以只因旋可只為義一分以只嫡長門守
白其出海防守付一通字

第四十二

一 御膳長門守殿片出府守因旋一件一箇條忘

大納言中少將上其有指目守付字

一 附 御附札字

第四十三

一 京師守之商抄

第四十四

一 御膳長門守殿片出府守片奉出指片出府守字

第四十五

一 同日出府守 御目見片 御付指目守付
字

第四十六

附
一 附附札字

第五十二

一 風說

第五十三

一 御賜長門身殿

公方操公忠刀拜領也 作信也

臣等分字

第五十四

一

近衛殿中侍辭職 我法時子高ノ荒人疑惑也生

可申何分也勉張也主職也為左殿云々ノ我分

此指也改也連也書字

一 風說

第五十五

一 同斷

第五十六

一 同斷

第五十七

一 同斷

第五十八

附
一 詩歌字

中五石而之越姐之所遺責在焉大以爲其當時勢
宜國之所業辱之在拘以事之可也此之在考始而之
區之鄙夷日夜難忘而止無暇之世論以之也
留之近僻之儀論並其合居以之身亦願得此周之中
尤世之之儀論也而之而政体以之在拘以之身中
於史之懼之也而之而政体以之在拘以之身中
分而思而而之也而之而政体以之在拘以之身中
先年之來度之中五石通待者之也而之也
所一和之也而之也而之也而之也而之也而之也
見之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也

觀語之義以之也而之也而之也而之也而之也而之也
臨之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
何之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
和之所持許條約而之也而之也而之也而之也而之也
授也而之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
奮激之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
也而之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
期也而之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
拒也而之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也
俗情也而之也而之也而之也而之也而之也而之也而之也

所至也。以何為批判仕。 慮慮、与之鎖國、町
田親也。所確守と相り招き唱ひ破約戦争、之從我
主強仕壯年血氣、者上情言激り也。 礪成、是
彼我、形勢を考へ彼、所利技術を以て、者、一在國
之從我、主強仕強、彼、情群、我國有、之、事、也、情
商會會、禁、之、以、深、清、議、論、為、之、每、端、也、分、也、
一旦、之、政、變、之、形、也、來、一、人、心、怖、之、去、崩、解、之、勢
也、可、也、冲、天、下、之、勢、合、之、強、く、離、之、弱、く、此、之、離
解散、人、心、不、一、且、有、事、時、恐、東、強、虜、之、相、當、り、也
義、之、何、也、忠、義、之、道、一、也、之、事、存、也、死、之、在、鎖、國、一、也、

中、侍、夷、之、大、体、之、間、係、重、く、り、為、大、に、根、本、を、毀、れ、る、
是、等、の、枝、葉、を、説、く、も、可、也、 以、武、を、議、論、草、野、
可、何、知、り、之、無、く、り、為、期、に、枝、葉、を、是、也、也、不、法、凌、却、
義、也、來、仕、の、筋、の、一、も、名、を、欺、之、を、考、り、之、故、に、能、可、守、
之、是、也、改、の、能、可、改、之、守、之、り、之、兵、家、之、常、典、鎖、古、も、
多、能、也、也、也、一、并、局、の、以、不、能、開、之、鎖、古、を、局、の、以、一、即、國、
体、を、立、之、彼、り、凌、辱、怪、侮、也、之、而、之、鎖、も、真、之、鎖、
阿、久、一、并、も、真、之、開、之、阿、久、也、一、開、鎖、之、無、君、の、即、國、体、
上、之、言、之、也、一、即、國、体、を、立、之、也、一、在、鎖、和、戰、之、時、宜、
隨、之、也、殊、膠、柱、之、義、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、一、也、
又、即、國、体、を、立、之、

基本として、大倫大義を以て天下の議倫、
純一人心和親の道あり。此の道、即ち物議終るに起るの
本意也。熟考して、
一、武、由簡純然忠合体を
即國体あり。即ち、君親を以て、
執起りて、
二、流、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

大綱として、
一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、
十一、
十二、
十三、
十四、
十五、
十六、
十七、
十八、
十九、
二十、
二十一、
二十二、
二十三、
二十四、
二十五、
二十六、
二十七、
二十八、
二十九、
三十、
三十一、
三十二、
三十三、
三十四、
三十五、
三十六、
三十七、
三十八、
三十九、
四十、
四十一、
四十二、
四十三、
四十四、
四十五、
四十六、
四十七、
四十八、
四十九、
五十、
五十一、
五十二、
五十三、
五十四、
五十五、
五十六、
五十七、
五十八、
五十九、
六十、
六十一、
六十二、
六十三、
六十四、
六十五、
六十六、
六十七、
六十八、
六十九、
七十、
七十一、
七十二、
七十三、
七十四、
七十五、
七十六、
七十七、
七十八、
七十九、
八十、
八十一、
八十二、
八十三、
八十四、
八十五、
八十六、
八十七、
八十八、
八十九、
九十、
九十一、
九十二、
九十三、
九十四、
九十五、
九十六、
九十七、
九十八、
九十九、
百、
百一、
百二、
百三、
百四、
百五、
百六、
百七、
百八、
百九、
百十、
百十一、
百十二、
百十三、
百十四、
百十五、
百十六、
百十七、
百十八、
百十九、
百二十、
百二十一、
百二十二、
百二十三、
百二十四、
百二十五、
百二十六、
百二十七、
百二十八、
百二十九、
百三十、
百三十一、
百三十二、
百三十三、
百三十四、
百三十五、
百三十六、
百三十七、
百三十八、
百三十九、
百四十、
百四十一、
百四十二、
百四十三、
百四十四、
百四十五、
百四十六、
百四十七、
百四十八、
百四十九、
百五十、
百五十一、
百五十二、
百五十三、
百五十四、
百五十五、
百五十六、
百五十七、
百五十八、
百五十九、
百六十、
百六十一、
百六十二、
百六十三、
百六十四、
百六十五、
百六十六、
百六十七、
百六十八、
百六十九、
百七十、
百七十一、
百七十二、
百七十三、
百七十四、
百七十五、
百七十六、
百七十七、
百七十八、
百七十九、
百八十、
百八十一、
百八十二、
百八十三、
百八十四、
百八十五、
百八十六、
百八十七、
百八十八、
百八十九、
百九十、
百九十一、
百九十二、
百九十三、
百九十四、
百九十五、
百九十六、
百九十七、
百九十八、
百九十九、
百十、

勅令一條理別死人心感後任の退宿一且
進法に改め偷安の陋習も奮發任 神妙信非
人心一和一圖の正意を求むる後種々の物議も氷解
作り毫も内顧の慮患せし由國威凜然と大勢に相
振り 即大業も如斯可任即と評し 秘見の法也右の
始に 即廟議の上をめぐり大勢の消滴も亦亦度
の排りもせしり為る數代世限 即窮命を求む
此恩深身に溢るる存りて其業を報効し心は之に在り不
圖時勢の感發任の不振憊意中上も之に食す
味進献仕見方區々 鄙謙意は亮亮と中上度

子部合の義も此也なり 此中捨たぬ度重なる事取
以上

正月

松平大膳大史

新編の義も 演説中其心可中書

但右此通の正月に之を其得大弟七永井権業
三條御上指し出され付也其考仕也此年十一月迄
此通の事方屋の月日多し 信阿とん

第二

日録の義も仔細に越中守殿の此作通
此中付寫

此等事を承り推して予を問先一日に確意と云れ
おのころより中合可申上と云ふ事利度中給上
高師の撰指は疑意ありし私家承、永井雅業に
中者より、此者能く心得生より智是、此身可と申
与中述道教ふれりし、信不問先一日塔彩色を爰
一、予述永井と呼出、一、承りて教程を利度出中
述いし、大要あるなり、予亦一層若んも其指
何事やらん十二日、幕命を以永井高師に孝思致す
趣あり

但右二月、日由あり

第五

西家永井雅業即先中流下中述由

大畧序

長州は西家永井雅業、公多分即同、義を長州度
々述は、義分、右同人、此呼、西家同人中、述は趣、上、未
此、而、重、方、也、分、け、論、し、時、に、當、今、和、國、に、不、重、も、色
其、り、申、り、り、り、西、家、君、親、り、西、家、和、事、に、不、重、方、に、義、に、分、今、
其、家、交、易、を、悉、く、論、す、以、前、に、經、玉、を、交、して、出、來、市、
也、其、當、時、に、交、易、を、多、く、害、多、已、く、多、利、を、一、つ、も、得、
し、ら、る、事、多、し、而、に、隨、て、世、改、革、を、申、事、長、州、に、底、意

初命者之指... 度来... 指...
勿論亦不... 事務... 曉... 天下...
為... 可... 見... 亦... 亦...
母... 在... 中... 世...
之... 亦... 亦... 亦...
所... 一和... 修...
之... 之...

第七

大和守... 大和守... 大和守...
大和守... 大和守... 大和守...
大和守... 大和守... 大和守...

一十月大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...

一十二月... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...
大膳... 大膳... 大膳...

九重深處 玉座時論秀 廟堂遠共

且一時慷慨 輻湊仕致也

天下之公論 亦不待言也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

破約攘夷 亦時勢之必然也

國東より此に任じらるる如きは國事也 皇國の海軍
に在りし尤も事多し政府より條約調停に在りし
は同盟の國より事多し是又其後多し在りし
如く候 天朝即ち納降し能く其卒に候は候り
盟の事多しは彼も各國に在りし例に準じ立し信
に在りし 皇國の事多しは且國東に武
將の孫梁の如く亦其の面目を失ひ浩然の氣を
有し事多しは御用に在りし是我の由に在りし
在りし其の如く拙者にして智者に在りしは其の
航海の事多しは其の如く是も海軍の事多しは其の如く

數十年航海の事多しは其の如く是も海軍の事多しは其の如く
年 皇國の海軍の事多しは其の如く是も海軍の事多しは其の如く
津の如くは其の如く是も海軍の事多しは其の如く
さふ及中海諸の事多しは其の如く是も海軍の事多しは其の如く
國の事多しは其の如く是も海軍の事多しは其の如く
口に艘の軍艦を朝に東に夕に西に海軍の大砲
を發し其の如く是も海軍の事多しは其の如く
引りし陸路の將士を命に是も海軍の事多しは其の如く
艦の如くは其の如く是も海軍の事多しは其の如く
の如く是も海軍の事多しは其の如く是も海軍の事多しは其の如く

之英艦之竊禁せらるるに依りて其日國艦動難
指船只其人等亦馬関を渡り東に去る事多し其
多鏡也照して見るに明に六十餘艘あり其後
海を過り國とて沈みたり一は市中沈みたり三は東
艦に官を信じて沈みたり國も啓亡て甚く我
を中へ隣國を救ひ位に危し角も遠國へ遣りて其
去る者亦亦所に素より日本に頭目より其四支國
擧て保護仕むに難し其船より其四支國より其頭
目之用を成す事能はざる又其船の勢は其懸天に
狗等にて彼恒言に日本に二三千の兵を以て隔るるを其

説由て起るる不ふ斯る時其必りて京師に擁護あり
の許ある第一京師を懸吏に歸し保たれり其
百六十餘艘あり其後其為に西隣せらるる事思ふ
も其に其事は其又數百に太平鼓腹に武士を以て其平
也其事に事端あり其其利害に其音に辨て其
能に曲害に我に在り其利に彼に在り之に時勢事理に
其任りて其其事也其其事也其其相又頼國に
中義に三百に其其其其其其其其其其其其其其
作付り其事に其其其其其其其其其其其其其其其
且天朝所隆盛に其其其其其其其其其其其其其其

中事も只し由らなく 皇國即旧法に中
而し廿し 伊勢神宮に 即誓宣天日し照臨
を名りたる 宣化を布り及 賜ふ厚くより此事の
由らなく 皇國水海に危し角も天日し照臨を賜ふ
而し悉く知 百箇事思ふを 皇國中を交へて
神意を承けし 命を承けし者上下を承けし 祀を
し志を継ぎし 事思ふを 承けし 祀を 神后
之韓を仰 賜ひりしを 神祖 思ふを 継ぎ
給ふ御事 之莫大し 御大孝と 今以稱し 承けし 祀
古に承けし 海神に 奉明命を 承けし 之韓 亦若千の

國何事也 關石 給ひ若し 關石給ひ
即征代之韓 之志也 承けし 祀を 神祖 思ふを 継ぎ
當今も大御若千の國何事也 關石 亦若千の
傳りし 皇國を承けし 刻し 皇威を 承けし
承けし 皇國を 承けし 刻し 皇威を 承けし
宣し 皇國を 承けし 刻し 皇威を 承けし
假令 皇國を 承けし 刻し 皇威を 承けし
而し 皇國を 承けし 刻し 皇威を 承けし
虧き 皇國を 承けし 刻し 皇威を 承けし
國に 皇國を 承けし 刻し 皇威を 承けし

時勢多變中土而後其眾為死... 亦地待眾

松平大膳大史家系

永井雅樂

三月

第九

土抄書局抄

方文畧... 勅書... 宸襟... 幕府

失政之多... 天朝... 將軍自眾... 永井雅樂... 倫大... 容也

四月

第十

吾去矣諸友對此宜為隔世想我即磔市此幅乃有生色也

二十一回猛子藤寅

第十二

以嫡長門守厥出洋京之義存 即所不在

作出此處守身守

唐美之志並 自我身大睡其存意之旨先遠家臣
永井雅樂也 內之言上之義者 以守身之深 處意
此為其 忍事今 守身之 當地道 乃 守身之 守身之 守身之
振其 思其 於委細 守身之 守身之 守身之 守身之 守身之

即月何古事

但得至之趣武辺而 守身之 守身之 守身之 守身之 守身之

即月何古事

即月

第十三

風説

長州藩出嫡長子長門守厥先 守身之 守身之 守身之 守身之 守身之
廿八日所上京之京京 守身之 守身之 守身之 守身之 守身之
多人數 守身之 守身之 守身之 守身之 守身之
守身之 守身之 守身之 守身之 守身之

回叙

松原大膳重頼出陣長門守指日月七日甲子東河原町
二条下此日分原上取遠為長門守前月之旬公進之相
也之原中此日分原上取遠為長門守前月之旬公進之相
横山通之陣師取此日分原上取遠為長門守前月之旬公進之相
中の人數之元百人計此原上取遠為長門守前月之旬公進之相
百人余當月五日東海道中此日分原上取遠為長門守前月之旬公進之相
此日分原上取遠為長門守前月之旬公進之相
即之系之原上取遠為長門守前月之旬公進之相

此の中へ何れも無き

五月

回叙

長門守長門守殿上京之由上京 勅命由上京
守付上一見之仕由上京之由上京 勅命由上京
元就の来親 王上京之由上京 勅命由上京
守護之仕由上京之由上京 勅命由上京
一長門守殿上京之由上京 勅命由上京

趣即懇考

廟高即竊

勅定

在命也

此威更迭、庶幾遠背、
務案此、中書、
者、
謹此、
上、
中、
弟、
子、
得、

一 文久二年五月二日

松平大膳大史

第二十二

國志、
大納言中、
即、

一 國志、
一 父朝臣、

右、
威、
抄、

公地、官武、而皆世因襲之事
君臣之名多正、且年未遠、
上京御勤、可市上因襲、
國東、出委任、
即糾、
廟、
此、
向、
一連、

右、水井、
再、
右、
即、
但、
上、
右、
朝、

九月十日

松平大膳大夫

第二十二

風説

一 江戸長州屋敷之出来り管示 公意新川邊り
 一 此處之江戸美濃中入總大将之也之来り事
 一 長州之系地總西歸之官天掃摩中入先月より此
 書居り事

一 長州方面自今屋敷之九七百八余諸合員之進之屋敷内
 普請中より去りて九月九日七時庚七費月より九月費月
 位し大砲七車費在七総程東洞院より系寺所上降

自今屋敷より引込中より九午當時より見物人多く塔に
 愉快なる也事 在十日立派敷より由長州方面係
 組頭之官九郎之高事 人より係事より長州より
 少くは雨事

一 長州屋敷去月十日夜迄之出来り月九日自今屋敷に
 休息暇の由築地内回箱より由 即月迄之山科に
 里に滞り居り居りより事 山科村西に新寺柳所也
 西籍の在居り居り表向に之病事と按居り居り滞り
 上の事 是より長州より殿より此勢九精兵七百人
 斗と云

廿月

第二十三

御家來合の寸高抄

當時 上皇の連任信長を 將軍棟 御上洛の上
御之家若國の面々印を立在る信長方京師に
御呼寄の由 願ふ事々向後之御國体は
為違國體領國之論一休但宗也と稱し以て後皇論は
之の若く上々 天朝の省々 公方棟並銘之主合
省々故の事りり天子皇々大各階位と後皇の事り
易き事との在様と其の始息の事師の上代記と云々

其後之 御上洛の 御向古備の 新居中の 右邊道管領等
多長御の進退の事なり可中 御上洛母の事りり
さして此の事公も其の事國也と色之政事 而然在り
此の事國元より御國政世話なり可中 主事の上
安んずる一変の事ありと云々此の事進退の事國備始
息の事あり以後之御備の 後之御國政の 始之事
御備の備を主事 其の事御國政の事可也事
且事の上御の事付事可中 御國政の事 且事の上御の
皆銘し 且事の上御の事 御國政の事 且事の上御の
二通の事あり 且事の上御の事 御國政の事 且事の上御の

六月朔日

右於所前水邊

第二十六

此上系之書為上方等之進獻物之類也
此水何の字に付家

私等所上系仕之書案之系初為國之官事部之互
寄之言據合も之系之付而代上請言上 所可奉
何 所候進次之度目候者柄門家之官柄之系之由中何者
此紙近衛殿一條殿西園寺殿より由緒由之右紙
度者事年始案定例此祝進進献仕之御者案書

進獻物之振合も之系之御進修寺家執事奏也此由應

之由案 禁裏に進献可仕之系存之右之趣此是圖

可之由也上

六月廿日

松平大膳大吏

第二十七

風説

六月十六日在御所門之唱之系系石色利為前中松
上系之系繩之下之新寺之内止者同十八日右同新色利
何勢之度系家先法水等化及之者同道系議奏元
中山大納言換上系殿同十九日松平長門守初系部

此屋敷の御見上は引取の由存大膳奉初来世日
即上京の御見上の由に候也

六月

第二十八

東師曾問抄

- 一 松平大膳奉初来世日二十五日余町屋出候更本町
幸町迄に御見上可出候更本町
- 一 松平長門守御見上何程位金子持持来世日
尋ね候御見上之方取程に足指に由に在候中
- 一 松平長門守御見上何程位金子持持来世日
尋ね候御見上之方取程に足指に由に在候中

持持来世日首に候是中月右候者の方取持来世日
左御中より何れ確執に義理認給由に去月十七日
批者長門守御見上金子持持来世日中より出候

六月

第二十九

風説

長門大膳奉初来世日上京より御見上候者其麻疹取
頼ひり何れ方取持来世日御見上候御見上候御見上
中唱に御見上候御見上候御見上候御見上候御見上
大膳奉初来世日御見上候御見上候御見上候御見上

暫り也 即上格也 出落也 毎十中 留也 出也

七月二日

第三十

即上忘後 區區 乃 曾 我 且 在 矣 子 中 中 快
出 因 變 義 身 出 家 來 色 利 能 前 議 奉 元
括 出 於 子 付 二 通 字

大膽更 義 上 忘 後 今 以 下 乃 乃 引 就 在 以 矣 不 是 一 通 也
其 一 因 矣 上 心 律 正 編 結 吾 汝 乃 且 一 確 律 不 家 光
去 人 指 賊 為 中 上 以 越 付 何 一 一 即 何 古 一 下 也 為 矣 凡
為 前 出 也 而 也 不 也 仰 亦 乃 而 通 一 即 柳 念 即 亦 解 結

取 一 一 難 言 仕 合 子 存 心 也 即 辨 解 一 事 亦 偏 心 上 也 以 先 般
動 使 出 東 下 身 大 膽 更 下 一 即 何 何 古 一 下 也 乃 連 出 結
中 上 抽 丹 繼 以 括 仕 亦 乃 乃 也

七月十二日

右一紙

先 般 長 門 守 一 大 膽 更 深 意 上 德 以 因 旋 仕 而 括 一 也 仕 作
少 以 甚 難 一 也 終 難 也 和 並 中 越 以 亦 重 太 多 件 者
地 忽 揚 言 係 難 結 仕 以 分 之 一 也 偏 心 身 一 先 而 動 仕 而
括 大 膽 更 分 中 越 以 付 不 也 中 上 亦 乃 而 括 亦 仕 度 父 子
一 月 一 聲 下 一 也 在 尤 長 門 守 一 也 亦 乃 而 括 亦 仕 度 父 子

得與五月中候月隨仕度去後也 次會並可上布也

七月十二日

右一紙

但去旨月布路、初中村九兵衛桂小五郎三條
大納言殿下月、指也、

第三十一

七月十六日於學問院儀備奏兩宮後大納言中山冠
大納言三條河原大納言坊御所、宰相中將御所
曾上出西會、上長子清並、御柳念出、水解、心、
作也、出、中、付、三、通、寫

一天氣所窺。即年某月、為三、中、上 處、女、上、為

遠、可、多、中、所、禮、長、則、守、一、即、因、命、在、賜、御、禮、
御柳念出、解、手、於、也、出、右、右、即、禮、

一 九月十三日、於、中、上、勅、使、出、中、上、向、後、父、子、中、候、因、
旋、可、仕、也、中、上、

即日即處出、中、上、通、

一 永井雅某中、出、中、上、每、月、讀、詞、似、寄、一、身、上、一、件、委、
細、海、況、及、中、通、一、處、無、事、多、上、右、思、自、一、言、類、個、方、
中、遠、一、身、上、一、周、即、是、器、出、水、解、一、身、上、一、分、即、送、一、意、
少、為、去、旨、自、以、來、上、一、一、必、柳、念、出、手、振、也、即、向、右、也、

為年事

右左通

一 去年月日 作出 勅使關東上公持遠上付任

作書 勅使關東上公持遠上付任

此信賴上為年事

右左通

一 長門守也先帝子也 作出通父極意奉公因旋之

此信賴上為年事

右左通

一 大藏少輔也 作出通父極意奉公因旋之

後州上自公戮力奉公 勅使也即輔翼仕度

義守上自公戮力奉公 勅使也即輔翼仕度

附

御附札寫

先達上自公戮力奉公 作出 勅使也即輔翼仕度

轉上上 勅使也即輔翼仕度

旁上通東下奉力可仕上奉 勅使也即輔翼仕度

上内於爰元右通 勅使也即輔翼仕度

言上如也

一 二年十一月辭議 而後 勅使也即輔翼仕度

上知りて毎刻仕りて第一素高以連江の海軍も自航
御用也也東の事今一層言を於て於幕府
當攘夷の海軍の振作に部考の爲に純一と弟三條
とと東の主張の存をたすに任じたるに於て東の
尤二事一は東の事一は西の事一は部考也と十一年
元東三事と云作知りて其の旨を二事一は海軍可仕
將軍家一橋と即同体也の成り趣前中將と
一心の成り上ありて也上洛 廷議の盛舉と爲
立りたるは海軍の振作又高更の愚雜也抑ハ戰臣
之歸嚮也應いりて即或虜之慢を不文衆人之望

恨も同日一法を奉る其謙宜意は只此に在り
予二事の一は海軍の振作也其考中は在りて其旨を
今一層言を於て於幕府の振作に及中將の振作也
此稿子も同日

五月上中自以の形勢を考て 大樹公 上洛轉易の由請
意の元自然 勅命通 上洛の請を以て而して其旨を
汁の期限を定むるに於て其旨を以て其旨を以て
不遑也 上洛の請を以て其旨を以て 勅使の事
与也 作命通也 勅使の旨を以て其旨を以て
上洛 勅使の旨を以て其旨を以て 勅使の旨を以て
上洛 勅使の旨を以て其旨を以て 勅使の旨を以て

予情通 處意為先一檢越前等可任採用

二條等時之事務等可任之也 即何者

尤所信之上越前今秋可召上二条為等也

勅使上等 仰付可也

一 第二條之制府之侍所 處意為先越

朝議之次第巨細等事御所等可任之也 禮儀

等所等事也 仰付可也

第二條第一條等進上進等之上上第二條等

一 前條通中上上之等事也 同前之格等事也 多

等事也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

之程也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

旨等 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

定也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

仰付可也 仰付可也 仰付可也 仰付可也

此 作上上因旋可仕と云々

尋問 道第一第二一事と云々可然り第三事と

一摺再藏後之趣前時と云々總裁亦之至今七月一日

所請並申之後若云々と云々言上と云々物上と云々

會通し行て云々云々と云々當亦大膳奉此年某

大村家々々々依頼と云々取於穿束程云々調和

殿旨徹底指生抽丹條と云々云々 作出於

但中文 勅通と云々大原御 勅使始末と云々載

参考と云々

第三十回

風説

一 長砂と云々之板玄瑠抄中者ハ第一等ハ人物と云々

序次郎婦婿と云々

一 右玄瑠抄中谷正亮大膳等幾助小出刑部長藤と云々

右等と云々者云々ハ云々交唐中と云々

一 大膳等殿内家元永井雅集と云々者執權と云々者云々

右ハ大膳等殿内切少少所側面右執事者云々

由能事大云々物云々由能事云々中云々右大膳等殿内云々

大和等殿内云々候合と云々云々云々云々云々

所信云々云々云々云々云々云々云々云々云々

と申す事都てしる事由り也考文久板之端等と
此物取地較の中由り長州京都此留石宮元記等
右雅集所へ系り中少りい事見一人等し由中少
何故に雅集中少り付久板等事見也切教也集也企
石中少り系り事見也教也厚く禮也述麻も事
菓子取在在九段之邊に拾出り事見也蓋も取り得り
事付り由古事付り趣に此度出出府由京談中
上段回へ密り也短文事綴り分永井雅集抄三條之邊
一文中事付り由右雅集志赤西段り由中事
但右二條之邊高きり酒井若狭也折板心へ事見

第 三 十 五

風 説

長州廣徳寺と系於 天朝へ却て不潔に也 思召
正、遠 執、道も可也 作出り事長州義章も事
之知事少新し事色も多疏有し尤廣中國是も是
事仕り不智に上り事先也人集會大評定也一集事
事得物も事合也 事武へ事見へ事文因旋可事し事
事起り也 付事障部執權人布多事石宮一宮部事
改し物申村九段之邊桂小寺取之入事有る長井段等と

中層殿立石の上は東世彌意多子に語後吾に指中
 述盟誓の心協條目力に及べし一更且し徳に於天下可
 知るに世多しと事あるに長河は可成る所一人教皆少壯
 平生究竟武夫者之也唯執事と上方の任備士海人
 巨猶子に應橋右守尉内儀論は多端に於て方意
 接し周布中村桂三人の已に可仕規則一定意に四
 條一筋に... 和天以來左層殿に尋ねる何事と云ふに
 出會ふ仕ふふに存存り可仕と云ふに始ふに明土層
 上系に可仕と云ふに及む極元と云ふに邊一人に右擇也方
 應橋人の窮の中は由はる可仕と云ふに事あるに

一又二院の長層の交表向合... 其處り家出せり爲方内論
 未歸院... 中丸長し蕭牆内移... 其處り...
 中永井推業... 中者... 中造... 謀...
 福原乙人堀喜... 野村和化... 中合... 七月...
 江州... 迎送... 物色... 粗糲... 存念...
 中女... 授... 見... 直... 永井... 海... 右... 存...
 永井... 子... 已... 濃... 小... 徹... 仕... 伊... 勢... 何... 名... 出... 大... 板... 表... 結...
 中... 右... 身... 右... 夫... 人... 者... 自... 訴... 仕... 仕... 長... 押... 大... 中... 小... 出... 世...
 玄... 瑞... 中... 匡... 生... 私... 命... 中... 出... 會... 信... 人... 物... 而... 此... 處... 義... 奉... 上...

謀言對國元上其押過以爲其元上子細其
表向止論立而私之國官其表原侯号上贈終其南
之白論上其行以指因旋成之在國以上其表狀取
投言 幕府の長州上其任指成之不可爲其内其好
謀可思之其行以指因旋成之在國以上其表狀取

一又一説長州侯今月十六日於學聖院近衛園中其議奏其
臣對其長州侯今月十六日於學聖院近衛園中其議奏其
女表立因旋成之其行以指因旋成之其行以指因旋成之
因旋成之其行以指因旋成之其行以指因旋成之其行以指
即上居之上天下之議論を極めり中而因旋成之其行以指

即上居之上天下之議論を極めり中而因旋成之其行以指
其行以指因旋成之其行以指因旋成之其行以指因旋成之
其行以指因旋成之其行以指因旋成之其行以指因旋成之
其行以指因旋成之其行以指因旋成之其行以指因旋成之
其行以指因旋成之其行以指因旋成之其行以指因旋成之

七月

八月二十七

風説

一長州の象老利法候也 廣物因信 極上象老 此度付係大徳寺之禪者
人物里從者二百人 長州世子馬上轉裝多本屋河
邸上往復阿るる事

一長州屋上東之分東部也屋長門也及後見也屋也
此多入也東部也利屋也及上東之部也
月紫智院之職奏元後論也

七月

第三十八

西文字之月也一人侍在古一人出府古因旋也
即每古也作也

松平大膳美同長門也 官國之長為可也因旋也
去十二日言上及 歲少也
西文字之月也一人侍在古一人出府古因旋也

七月廿七日

第三十九

大膳更麻束作也侍在也
此也

大膳更父子之月也一人侍在古一人出府因旋也
即依物也西字也
作御也依之大膳更父子也
仕也

松平大膳方史也

七月廿八日

集

第百四十

正備長門守殿病氣甚快身付古家集
括出り書付字

大膳交病子也門守殿不勞少快方付先遣伏見
屋敷近門有保養仕り家今日快急仕り召仕候中出候
以上

七月廿八日

松平大膳交病家集
某

第百四十一

八月二日於學習院議傳奏出兩役戊午己
未以來 官武降點出候等之輩也之再

出候為在地下家下候之台とらし格付

子之故免りし格付因能可致義身御禮

長門守殿口出候後致書付二通馬

戊午己未 官武降點出候等之輩也之再出候

於地下家下候之台とらし格付之故免り可也之格

思召之三條入道内府義士之為慰忠魂仕留在大臣守

而水産守中納言之為也也出格之義士猶大綱之成

思召也且往年束長島驛等之為也之格死之者始之後

安藤常方格向吉右衛門以下諸國之士於關東死眾

且守死候之者國事之死也守近之伏見一掃等之

此上因能據篤上德考仕得方一糸第云糸上
即多越即戊午年之
無此也
歲意即向仕方以多粘件
中層仕方先左通廉
此中引指在平也

右附札

一 楊片 作出身
更一件
以

一 戊午二月廿日

一 容易
下回糸約
新片
容片
却

右附札

下回糸約
上言
言上

御防衛に五増五損を指す何事か多敷き事なりと云ふに難
成事なりと云ふ國に事し要害を留むれば其

次に中付方一は 少食度 廟為るは其

一 同日四月二日閣下出御を致し即向合す 神事

事所結文之懸言高之勢中或備古懸可結國指し

大層一なりは 御付の指し起る事也 御海より後

西警備并伊勢に即大層上は 御付の事也 只今に於

て 廟意を以て其の事なりと云ふ事あり

右御附札

一 同日 神宮出方切す句論於事所也 三種御國重

並 帝位は此為重なり事あり 御中より何事

格別大念進し御事なり事あり 御事念ふ事あり

此起度也 思ふ

一 方々第一案第二條より 高重なり懸難を據り義徒

之保衛に及んぬ其層に懸る事あり 御事念ふ事あり

御事念ふ事あり 御事念ふ事あり 御事念ふ事あり

御事念ふ事あり 御事念ふ事あり 御事念ふ事あり

御事念ふ事あり 御事念ふ事あり 御事念ふ事あり

御事念ふ事あり 御事念ふ事あり 御事念ふ事あり

御事念ふ事あり 御事念ふ事あり 御事念ふ事あり

第之案也一日因旋可仕白幕之在在少自越前上京
之案今一急 却廷議也 作付度終り多しあふて
後河之精之徒合可仕也

右御附札

大樹上落々 勅使是府以前於河東河内
上之義守自 相廷之也 作付白一件之勢
昇康之命並一可也 御覽 思平之越前上京一
是也何歎 殿旨也 作付白幕府之極
言之案終り可也 中食 思平自一橋越前
河内之也之是越前上京案 勅使也

作合の旨既之案也右案の存當時

殿旨也

平分の所の也上は保長則守也府之也

勅使也

作付之旨も得之候合右五人も越前上京也

兄合の指言上りて下りて當此再考可也為之也

一右後河内自心歎力程白義之徒屬上候合也而於河東
因旋仕幕議決之目途付の上りて將軍上落列候
豫案之卷典也御覽八月八日 勅使也
其也 作付也 公御使合候之由基也右立河内也冬
可也の也

右御附札

手前通薩州同心裁力にて尚又正裁に薩州
後合因薩州東より而その保心 皇國挽回
の期 乙武業久の巻 薩威之糾の巻
只この通國是の目通おけり今一應造 薩
字の指渡す
右印も常ある事件あり即觀可仕裁り可也此中
乃事前件之儀 寢動し 此方先事如之 任事
之在門守の中合り分ち府有仕度事ある以上
右御附札 若多の義也 思わ仕向可也 作也

右八月二日此移也同月四日此附札也取也取也

第百十二

新師守之筒抄

昌正廿二日此移也同院議奏元傳奏元松平右膳奉殿
此而合之上水戸守中納言孫左衛門右衛門守中納言
此而合守之此海之此東此息長門守殿此之此高地此農
只此築建上此持りりり此持招く事乎之此中

八月

第百十四

此移長門守殿此府守分此事持也此福守也

去月十九日學問院上座用呂舟往出如受議傳卷既
列甲乙丙丁 作如以多之千方文字之因令人傳弟可
波多 勅命之々々右長門守出府波多而委細
之義之可申上之申付越越以上

松平之應重内

八月廿日

山添金一助

第四十五

同勤出府身 即月見之 傳信守付寫

松平長門守

松平健之右 即月見

上意只之

但之右

勅書之指上之奉

右海守松平之院極願即先申方出越之々々奉

八月廿日

第四十六

此書來來原良藏看腹之書吉德涉於守

付寫

私義華守守

且標美之志之乃而之々々從來忠

義之守考以奉却之不出吾我之書來自阿又之々々
阿又之々々諸道之々々不之々々守我割波信死後餘
眾守之々々守之々々上

八月廿八日

風説

法名松水義烈居士

来原良花

右書可割腹之旨お徳王由同人元永井推集し
論を主として一高きを薩州にありて説示し其後
より多し説は侍らぬ薩州論を角南開國領國有
一説後より多し其は長松より何も無益に中より
亦師に説は長松より薩州論を長松に論を師より
其用指しありて右東原より其世より相薩州桂州
中者より其は長松より其は長松より其は長松より

同志中議倫及び其を師中法正永井同倫者も
越前光公忠也氣也其れ天下を為す師改革も有り
其の中存し不失其先き其は其は其は其は其は其は
も其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は
國にも其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は
有る福も其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は
引出し其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は
其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は
其事其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は
人其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は其は

長門守殿子進法色會為号も不務もくも今少
時之長也侍り指互復了寧上法中論もくも亦承服之指
子多帰宅仕何もあ仕居り名親大在才高竊も
徳も居服仕り由之居也

第百十七

風説

一 松平大膳左殿始之建在ハ國國論也此建在在
表の云々也此ハ破約體也中子之居愛ハ此也
永井雅業大膳左殿此ハ此也取遠ハ由也此ハ此也
備中中子之由也此ハ此也

一 長門守殿子進法色會為号も不務もくも今少

歳之也何ハ此ハ中城ハ此ハ中城ハ此ハ中城
指渡ハ長門守殿子進法色會為号も不務もくも今少
此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也
指子之由也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也
初命指渡ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也

一 初命、角何も在あもる也初命田一事ハ長門守殿
之ハ議論二ツ也ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也
不為哉んハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也
ハ大也ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也何ハ此ハ事也

此係付鄭守此兩級等由在... 即前...
至... 撫... 吏... 亦... 凡... 以... 中...

十月

第五十三

此係長門守... 公方操... 此刀拜領... 仰付...

出... 付... 字...

松平長門守

大和國色則

即刀代金
三十五枚

右... 即... 見... 上... 此... 中...

十二月二日

第五十四

近衛殿下... 此辭... 誠... 義... 此... 時... 中... 荒... 人... 疑... 恐...

此... 生... 何... 亦... 此... 勉... 強... 此... 在... 誠... 多... 為... 至... 度... 之... 義... 存...

此... 指... 出... 此... 建... 白... 書... 字...

先... 達... 亦... 隆... 由... 此... 抄... 寫... 且... 鞏... 毅... 中... 上... 何... 侯... 仕... 亦... 公... 報...

國... 之... 掌... 心... 力... 也... 矣... 處... 為... 費... 微... 即... 國... 威... 更... 強... 仕... 於... 指... 日... 夜...

其... 思... 仕... 於... 繕... 紳... 此... 方... 之... 指... 之... 此... 能... 忘... 中... 也... 且... 甘... 在... 也... 以... 獲...

幸... 願... 此... 近... 衛... 殿... 此... 以... 此... 辭... 誠... 身... 傳... 誠... 仕... 此... 時... 中... 荒... 人... 疑... 恐...

如... 之... 思... 有... 之... 亦... 在... 也... 此... 抄... 寫... 且... 鞏... 毅... 中... 上... 何... 侯... 仕... 亦... 公... 報...

重... 代... 亦... 為... 尚... 一... 日... 乃... 機... 此... 誠... 恐... 此... 中... 方... 今... 亦... 矣... 矣... 矣...

同制

一 長沙公使長井權業子去冬以来

公武合休

因遊寓了古勉居了五國之役也唱以了付東都

勅從了省より給て來右了付同人等も此府主人の層級
此中付了給て來可中了り也唱也付了奉

一 因有政の賜先日出所産隱居座敷に居て

政の賜も此取持の給何多り也到土州廣く大議論は
其の言も高の政の賜も隱居に居り也神仕の候中來
其の信も中付了遊に居り也

一 先日權原表に留りて其の言も打取可中務り也

神奈川に赴き其持長州人此層級に其被禁錮被不友
二百可免許に來中其大人數八十人其使也

十二月二日

第五十八

同制

附 詩歌字

永井權業了五國論也

公武の君の因旋

勅も

其省も其の付了國元層級此中付了由了常同人等

歌も其の付了也

公報君恩業未央

自愧四十五年狂

今成佛非吾志 願作天魔輔日光
君うたぬ死ま名命に憐く可く只思ひ多國の行末

官武通紀卷四終

續後行家字

